第 34 回 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス：AI 時代における規模、評価、戦略的重要性の徹底分析

Gemini Deep Research

エグゼクティブサマリー

第 34 回 2025 知財・情報フェア＆コンファレンスは、単なる成功した専門展示会にとどまらず、日本の知的財産（IP）業界が生成 AI 時代へと明確に舵を切ったことを示す極めて重要なイベントであったと評価される。本レポートは、同イベントの評価と評判について、多角的な戦略分析を提供するものである。

分析の結果、2025 年のフェアは、いくつかの重要な側面で画期的な成功を収めたことが明らかになった。第一に、40 年以上の歴史の中で過去最大となる 152 の出展社・団体を集め、規模の面で新記録を樹立した [1]。これは、コロナ禍後の停滞期を完全に脱し、業界の中心的なイベントとしての地位を再確立したことを示す定量的証拠である。第二に、来場者のセンチメントが劇的に好転した。過去には閑散とした雰囲気が指摘されていたが、2025 年は初日の来場者数が前年比で大幅に増加し、会場は活気と高い関心に満ちていた [2]。第三に、そして最も重要な点として、生成 AI がイベント全体の議論を支配する新たな重心となった。主催者による基調講演から各出展者の提供するソリューション、さらには来場者の関心に至るまで、AI は IP 実務と戦略のあらゆる側面に浸透していた [1]。

結論として、第 34 回 知財・情報フェア＆コンファレンスは、業界の喫緊の課題である AI というテーマに戦略的に焦点を合わせることで、参加者にとっての価値提案を最大化し、日本の知的財産エコシステムに関わるすべての真剣なステークホルダーにとって、年に一度の不可欠な集いの場としての評価を確固たるものにした。

イベント概要と経年分析：復活の物語

本セクションでは、2025 年に開催されたイベントの公式な枠組みを詳述するとともに、その成功を複数年にわたる回復と戦略的進化の文脈の中に位置づける。ここでの中心的な論点は、本イベントが単にパンデミック後の低迷期から回復しただけでなく、その規模と重要性において新たな頂点に達したということである。この「復活の物語」を理解することは、現在の高い評価を正しく分析する上で不可欠である。

2.1 公式な枠組みと規模

イベントの基本的な枠組みと、その記録的な規模は、2025 年の成功を物語る基盤となる。

- **開催概要:** 第 34 回 知財・情報フェア＆コンファレンスは、2025 年 9 月 10 日（水）から 12 日（金）までの 3 日間、東京ビッグサイトの西 3・4 ホールで開催された [1]。主催は一般社団法人発明推進協会、一般財団法人日本特許情報機構、そして産経新聞社であり、経済産業省、特許庁、独立行政法人工業所有権情報・研修館（INPIT）といった主要な政府機関や業界団体からの広範な後援を受けていた [1]。この強力な支援体制は、イベントが公的にも民間にも認められた、国内で最も権威ある IP 関連イベントであることを示している。
- **記録的指標:** 2025 年のフェアは、40 年以上にわたる歴史の中で「過去最大」と公式に発表された。出展社・団体数は 152、出展小間数は 328 に達し、これまでの記録を塗り替えた [1]。この数値は、イベントの求心力がかつてないほど高まっていることを客観的に示している。出展者プレゼンテーションも 47 社から 86 テーマが提供されるなど、コンテンツの量と多様性も過去最大級であった [1]。
- **相乗効果を生む環境:** さらに、西 1・2 ホールでは「SENSOR EXPO JAPAN 2025」や「測定計測展 2025」など、他の技術系展示会が同時開催され、相互入場が可能であった [1]。これにより、IP の専門家だけでなく、より広い技術分野の研究者や開発者との交流が促進され、イノベーションと分野横断的なネットワーキングのためのより広範なエコシステムが形成された。

2.2 比較分析：「閑散としたホール」から記録的な参加者へ

2025 年のフェアの評価は、近年の状況と比較することで、その意義がより鮮明になる。特に、コロナ禍の影響が色濃く残っていた時期の低迷からの V 字回復は目覚ましい。

- **低迷期（コロナ禍後）の状況:** 過去のイベントに関するあるブログ記事は、当時の厳しい状況を克明に記録している[5]。その報告によれば、当時のフェアは深刻な問題を抱えていた。
  1. 来場者数が極端に少ない（「①人が少ない！」）。
  2. 業界の主要企業である日立が出展していない（「②日立が無い！」）。
  3. 会場全体が「すかすかの印象」で、活気が失われている。
     この記述は、イベントがその魅力を一時的に失い、業界内での中心的な役割を果たせなくなっていたことを示唆している。
- **2025 年の劇的な回復:** これに対し、2025 年の状況はあらゆる面で対照的であった。
  1. **来場者数の増加:** 具体的な数値がこの回復を裏付けている。初日の来場者数は、前年の 3,212 名から 2025 年には 3,754 名へと、約 17%増加した[2]。これは単なる微増ではなく、業界関係者の関心が明確に回帰していることを示す力強いシグナルである。
  2. **主要企業の復帰:** かつて不在が嘆かれた日立が、2025 年には西 4 ホールの主要な場所（小間番号：W4-122）にブースを構えて復帰した[6]。業界を牽引するリーダー企業の復帰は、イベントの威信と重要性が完全に回復したことを象徴する出来事である。
  3. **活気のある雰囲気:** 参加者からは、「それなりの人出」があり、「参加者の関心度も非常に高いように感じられた」との声が上がっており、会場が活気に満ちていたことが確認できる[3]。

この劇的な変化を視覚的に理解するため、以下の表に主要な指標の経年変化をまとめる。

指標	コロナ禍後（定性的評価）	第 33 回（2024 年）	第 34 回（2025 年）	変化の分析と意義
雰囲気	「人が少ない」「すかすかの印象」[5]	データなし	「それなりの人出」「関心度が高い」[3]	来場者のセンチメントと会場の活気が完全に反転したことを示す。
来場者数（初日）	低水準と推測	3,212 名[2]	3,754 名[2]	力強く加速する成長と、イベントの今日的妥当性が回復したことの

				定量的証拠。
出展社数（合計）	低水準と推測	データなし	152 社（過去最大）[1]	イベントが史上最大規模となり、多様なプレイヤーを惹きつけていることを確認。
主要出展社（日立）	不在[5]	データなし	出展[6]	業界リーダーの復帰は、イベントの威信と重要性が回復したことを示すシグナル。

この分析から導き出されるのは、2025 年のフェアの肯定的な評判が、静的なものではなく、数年がかりのダイナミックな「カムバックストーリー」の成果であるということだ。その成功は、近年の苦境という背景に照らし合わせることで、より一層際立つ。パンデミックという外部要因と、主催者が AI という業界の最重要テーマにイベント内容を合致させた戦略的判断が組み合わさることで、この目覚ましい復活が実現したのである。したがって、2025 年のフェアの評価は、この回復力と適応能力の物語と切り離して考えることはできず、その評判は困難を乗り越え、業界における中心的役割を再確立したという文脈の中で形成されている。

テーマの深掘り：新たな重心としての生成 AI

2025 年のフェアを特徴づける単一の、そして統一的なテーマは、生成 AI の知的財産実務への統合であった。これは単なる一過性の話題ではなく、コンテンツ、出展者の提供サービス、そして来場者の関心を動かす主要な原動力となっていた。イベントが記録的な成功を収めた背景には、このテーマ設定の的確さがある。

3.1 トップダウンでのテーマ設定：主催者による方向づけ

イベント全体の方向性は、主催者が最も注目度の高い講演で何を取り上げるかによって示される。

- 主催者による基調講演は、「生成 AI 台頭時代におけるブランド戦略と知的財産管理術」と明確に題されていた [1]。この講演では、PEANUTS（スヌーピー）などの IP 活用事例を交えながら、生成 AI がもたらすビジネス環境の変化に対応するためのブランド戦略と知財管理のあり方が論じられた。
- 主催者がこのテーマをイベントの顔である基調講演に選んだことは、フェア全体を AI がもたらす挑戦と機会というレンズを通して捉えるという意図的な戦略の表れである。これにより、イベント全体のトーンと議題が設定され、参加者の期待感を方向づけた。

3.2 ボトムアップでの浸透：出展者エコシステムの AI への注力

主催者によって設定されたテーマは、展示会場の隅々にまで浸透し、各出展者の具体的な活動を通じて具現化されていた。

- **AI を中核事業とする企業:** パテント・インテグレーション株式会社のような企業は、「知財実務への生成 AI の革新的利活用に関する特許」を新たに取得したタイミングでフェアに出展していた [7]。彼らにとって、このイベントは自社の AI 駆動型の競争優位性を市場に直接アピールするための絶好の機会であった。
- **実務における AI 活用セミナーとデモ:** AI テーマの浸透を最も雄弁に物語るのは、各ブースで提供されたコンテンツの内容である。
  - IP コンサルティング会社のイーパテント社は、3 日間で計 10 回開催したブースセミナー・イベントの多くを AI ツールに捧げた。具体的には、Google の NotebookLM を活用した特許分析に関するセッションや、「人間 vs 生成 AI Battle」と題した一連の対決企画が実施された [4]。
  - これらのセッションは YouTube でライブ配信もされており [4]、理論的な議論を超えて、実践的な応用方法をインタラクティブに示すという、新たな教育・情報発信の形へのシフトを象徴していた。
- **大手企業の AI ソリューション:** NTT データは、自社ブースを「業務変革を加速する次世代ソリューション」を紹介する場と位置づけ、「知財業務への AI 適用に関するお悩みのご相談」を受け付けていた [9]。これは、AI がもはやニッチな技術ではなく、大企業の IP 業務においても標準的なツールとなりつつあることを示している。

3.3 来場者の反応：AI の転換点の認識

このテーマへの強い焦点は、来場者にも明確に認識されていた。

- あるセミナー登壇者は、フェアに参加した感想として、「様々な AI ツールが展示されており、AI ツールが本格的な普及段階に入ったことを強く実感した」と述べている [3]。
- この参加者からのフィードバックは、AI というテーマが単なるマーケティング上の見せかけではなく、展示会場で体感できる現実であり、業界全体の真のシフトを反映していたことの重要な証左となる。

これらの事実を総合すると、2025 年のフェアは、IP における AI 革命を議論し、体験するための日本における不可欠なフォーラムとして、自らを再定義することに成功したと言える。その規模と来場者数の回復は、業界が最も緊急に情報を求めている技術的必須課題を捉え、それに応える能力と因果関係があると考えられる。IP 専門家は、最新の動向に追いつくためにこのイベントに参加する必要があった。これにより、フェアの評判は単なる「知財の展示会」から、専門職の未来を占う重要なサミットへと昇華した。この戦略的なテーマ設定こそが、新たな成功と肯定的な評価の鍵であった。

より広範な IP ランドスケープ：主要な議論と国際的側面

生成 AI が支配的なテーマであった一方で、2025 年のフェアは、知的財産に関する他の重要な議論にも包括的に対応し、総合的な業界プラットフォームとしての価値を強化していた。この多角的なアプローチが、イベントの幅広い魅力を支えている。

4.1 国際的な政策と実務

グローバルに事業を展開する日本企業にとって、各国の知財制度の最新動向を把握することは不可欠である。本フェアは、そのための貴重な情報収集の場を提供した。

- 「世界の特許関係機関担当者による講演」は、コンファレンスの中心的なプログラムの一つであった [10]。
- このセッションでは、日本国特許庁（JPO）はもちろんのこと、世界知的所有権機関

（WIPO）、韓国特許庁（KIPO）、日本貿易振興機構（JETRO）による米国知財の概況、さらには欧州特許庁（EPO）からのビデオ講演が予定されていた[10]。
- これらの講演は、各国の政策変更、審査実務のアップデート、新しいツールの紹介（例：WIPO の PATENTSCOPE、EPO の単一効特許）など、実務に直結する情報を提供し、参加者にとって極めて高い価値を持つものであった。

4.2 IP と企業戦略の架け橋

イベントは、特許の技術的な側面に留まらず、その戦略的なビジネスへの影響にも光を当てた。

- 特別フォーラムでは、「『知財・無形資産』の投資・活用による企業価値の創造戦略」といったテーマが取り上げられた[10]。これは、IP をコストセンターとしてではなく、企業価値向上のための戦略的資産として捉えるという、経営層の関心事に直接応える内容である。
- また、政府の「知財推進計画 2025」に関するフォーラムも開催され、AI や DX の推進に向けた知財制度の見直しといった、国家戦略レベルでの環境整備について議論が行われた[10]。これにより、参加者はミクロな実務からマクロな政策動向までを一つのイベントで把握することができた。

4.3 業界課題への取り組み：人的資本と実務管理

本フェアは、IP 専門職が直面する内部的な課題を議論するフォーラムとしても機能した。

- イベントテーマの一つとして「知財×〇〇」が掲げられ、特に特許事務所や企業知財部における「人材不足」が重要な議題とされた[11]。
- 議論は、「求められている人材像」や「求められる人材になるためには」といったキャリア形成の問題から、AI 活用による事務所の生産性向上といった経営課題にまで及んだ[11]。これは、フェアが技術や法律だけでなく、IP 業界の運営やマネジメント層が抱える現実的な悩みにも応えようとしていることを示している。

これらの多岐にわたるコンテンツは、本イベントの永続的な評判が、その多層的なプラットフォームとしての機能に基づいていることを示している。戦術的な業務（国際出願）から、高レベルの企業戦略（無形資産）、そして内部の経営課題（人材）まで、専門家のニーズの全範囲に対応している。国際ポートフォリオ管理者、最高知財責任者（CIPO）、特許事務所の経営パ

ートナーなど、IP エコシステムの異なるセグメントにアピールする価値あるコンテンツを提供することで、強力なネットワーク効果を生み出している。これらの多様なステークホルダーが一堂に会し、学び、交流できる唯一の場所となることで、その包括的な魅力が生まれ、肯定的な「評価」の重要な要素となっている。これは単なる AI のカンファレンスではなく、日本の IP コミュニティの包括的な中枢神経系なのである。

エコシステム分析：官民セクターの融合

展示会場の出展者の構成を分析することは、日本の IP エコシステムの健全性とダイナミズムを理解する上で有益である。2025 年のフェアの会場は、公的機関、大手テクノロジー企業、専門サービスベンダーが相互作用する、業界の縮図となっていた。

5.1 公的セクターの礎：教育とアクセス

政府および準政府機関は、フェアの信頼性と教育的価値の基盤を形成している。

- 独立行政法人工業所有権情報・研修館（INPIT）は、会場内で大きな存在感を示していた[12]。
- INPIT のブースの目的は販売ではなく、公共サービスにあった。特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）や、知財学習用 e ラーニング教材（IP ePlat）といった、無料で利用できる不可欠なツールの操作体験や説明を提供した[12]。この教育的な役割は、特にこの分野に不慣れな参加者や中小企業の担当者にとって、計り知れない foundational value （基礎的価値）を提供するものである。

5.2 巨大企業の参加：イベントの権威づけとハイエンドソリューション

日立[6]、東芝[13]、NTT データ[9]といった日本を代表するテクノロジー企業の出展は、二つの重要な役割を果たしている。

- 第一に、それはイベントの重要性を権威づける行為である。これらの企業が多大なコストをかけて大規模なブースを出展するという決定は、彼らがこのフェアを IP コミュニティとエンゲージするための重要な場と見なしていることの証左である。特に、かつての不在

が指摘された日立の復帰は、イベントがその威信を完全に取り戻したことを示す強力な指標と言える[5]。

- 第二に、これらの企業は、大企業向けのハイエンドな統合 IP 管理ソリューションを展示する。これにより、参加者は大規模なオペレーションにおける最先端の技術やワークフローを垣間見ることができ、業界全体の技術水準を知る上でのベンチマークとなる。

5.3 専門ベンダー：イノベーションのエンジン

このカテゴリーには、IP サービスを提供する多様な企業が含まれる。

- ジー・サーチのような確立されたデータベースプロバイダー[14]から、イーパテントのような機敏なコンサルティングファーム[4]、そしてパテント・インテグレーション株式会社のような技術主導型の企業[7]まで、活気に満ちた構成となっていた。
- これらのベンダーは、特に AI の分野において、最新のツールや方法論を披露し、イベントのテーマ性を牽引する主要な原動力であった[4]。イーパテント社が企画した「人間 vs 生成 AI Battle」のような革新的なエンゲージメント戦略は、ダイナミックで有益な雰囲気の醸成に貢献した。

この多様な出展者の組み合わせは、各カテゴリーが互いの価値を高め合う共生的なエコシステムを創り出している。この相乗効果こそが、本イベントの肯定的な評判の中核をなし、より専門分野に特化した他の展示会とは一線を画す特徴となっている。例えば、ある若手の実務家は、まず INPIT のブースで J-PlatPat の基礎的な操作方法を無料で学び[12]、次にイーパテントのブースで専門的な商用ツールがその基礎の上にどのように構築されているかを確認し[8]、最後に日立や NTT データのブースでそれらのツールがどのように大企業のワークフローに統合されているかを見る[6]、といった学習の旅を一日で体験できる。この統合された構造は、市場調査、教育、ネットワーキングのための他に類を見ない包括的かつ効率的な機会を提供するため、イベントが高い「評価」を受ける重要な理由となっている。

現場からのインテリジェンス：来場者の評判と体験の統合

本セクションでは、来場者から得られた定性的および逸話的なフィードバックを統合し、クエリの核心である「評判」に直接的に応える。これにより、現場での体験に関するニュアンスに

富んだ全体像を構築し、肯定的な勢いを強調すると同時に、批判的な視点も考慮に入れる。

6.1 2025 年の圧倒的にポジティブな熱気

複数の情報源が、活気に満ちた魅力的な雰囲気を示唆している。

- あるセミナー登壇者は、会場の様子を「それなりの人出があった」と表現し、「参加者の関心度も非常に高いように感じられた」と述べている [3]。この定性的な評価は、来場者数が大幅に増加したという定量的データと一致しており [2]、多くの参加者で賑わい、活気に満ちたイベントであったという一貫したイメージを描き出す。全体的な印象は、コミュニティが再活性化し、自らの専門職の未来に強い関心を寄せているというものである。

6.2 コンテンツとネットワーキングの価値

フィードバックは、提供されたコンテンツ、特に各ブースで開催された多数の「ミニセミナー」が高く評価されたことを示している。

- ある参加者はこれらのセミナーを「大変参考になる内容が多く、知財関係者の方々にはぜひ参加をお勧めしたい」と推奨している [3]。これは、参加者が具体的な知識やスキルを得る場としてイベントが機能していたことを示している。
- 個人的な交流もまた、重要な価値であった。ある登壇者は、10 年以上前から自身の発表を聞いているという参加者と再会し、励まされたと語っている [3]。このエピソードは、本イベントが単なる情報交換の場ではなく、長期的なコミュニティを形成し、維持するためのハブとしての役割を果たしていることを浮き彫りにしている。

6.3 批判的な対抗意見：投資対効果（ROI）への疑問

バランスの取れた評価を提供するため、ここではある政府文書に見られる懐疑的な視点を紹介する [15]。この情報源は、こうしたイベントが「ビジネス促進の効果はありません」と断じ、単に「他者の情報を抜き取って同じような製品、同じような物を出すだけ」になる可能性があると指摘している。

- これは 2025 年のフェアに特化した批判ではないものの、無視できない重要な対抗言説で

ある。この視点は、イベントの「熱気」や「活気」といった感覚的な評価だけでなく、それが具体的なビジネス成果に結びついているのかどうかを、より批判的に検証することを我々に促す。高い関心と活発な活動が、真のイノベーションやサービスの向上に繋がっているのかという本質的な問いを提起するものである。

これらの情報を総合すると、2025 年のフェアに関する一般的な「評判」は、過去数年からの著しい好転を示す、圧倒的に肯定的なものであったことがわかる。しかし、完全な分析を行うためには、このような大規模イベントの具体的な投資対効果に対する業界の根底にある懐疑論を認識しなければならない。支配的な評価はポジティブなものであるが、この批判的な視点[15]を最終評価の枠組みに組み込む必要がある。そこで問われるべきは、「2025 年のフェアは、実践的な AI ツールや戦略的議論に焦点を当てることで、この ROI への挑戦に対して、過去のイベントよりも説得力のある答えを提供できたか？」という点である。証拠は「できた」ことを示唆しているが、懐疑論がより広範な業界の言説の一部として依然として有効であることは留意すべきである。

戦略的評価と今後の展望

本最終セクションでは、これまでの分析結果を統合し、2025 年のフェアの成功に関する最終的な「評価」を下すとともに、その将来への影響を考察する。

7.1 最終評価：文句なしの成功

第 34 回 知財・情報フェア＆コンファレンスは、文句なしの成功であったと評価される。史上最大規模を達成し、来場者数において顕著な前年比成長を示し、そして業界の関心が集中する生成 AI というテーマを的確に捉えた。

このイベントは、コロナ禍後のネガティブな雰囲気を効果的に払拭し、主要な業界プレイヤーを再び惹きつけ、活気に満ちた高い関心を集める場を創出した。広範なテーマに関する議論と、実践的でハンズオンの学習機会とのバランスを巧みに取り、多様なステークホルダーに対して高い価値を提供することに成功した。

7.2 IP 専門職の未来を形成する

本イベントがもたらした最も大きな影響は、日本の IP 業界における AI への移行を促進する触媒、そしてその進捗を測るバロメーターとしての役割を果たしたことである。AI がもはや一部の専門家のためのトピックではなく、すべての IP 専門家にとってのコアコンピテンシーであることを明確に示した。

多種多様な AI ツールを展示し、その戦略的導入に関する議論を促進することで、フェアは専門職の未来のスキルセット、ワークフロー、そしてビジネスモデルを積極的に形成している。

7.3 ステークホルダーへの戦略的提言

- **企業知財部にとって:** 将来のイベントへの参加を強く推奨する。本フェアは、技術のスカウティング、競合他社の動向分析、そしてグローバルな政策トレンドの理解を、極めて効率的に行うための比類なき機会を提供する。チームが参加し、ベンダーや国際的な講演者と交流するための予算を確保すべきである。
- **特許法律事務所および IP サービスプロバイダーにとって:** フェアは、マーケティングと専門能力開発の両面で重要なプラットフォームである。イーパテント社のセミナーのようなコンテンツ主導型のエンゲージメントモデルの成功は、将来の参加においては、単なる伝統的な営業活動だけでなく、専門知識を実証し、教育的な価値を提供することに重点を置くべきであることを示唆している。
- **業界全体にとって:** イベントが「人材不足」という課題に焦点を当てたこと [11]、そして生産性向上における AI の役割を提示したことは、重要な示唆である。フェアは、業界がこれらの根本的な課題にどのように取り組んでいるかを測る、年に一度のチェックポイントとして機能する。

7.4 今後の展望

2025 年のイベントの成功は、将来に対する高い期待値をもたらした。次回、2026 年 9 月 16 日から 18 日にかけて開催が予定されているフェアは [16]、この勢いを維持できるかどうかが注目されるだろう。今後の主要な課題は、AI に関する議論を「それは何か？」という段階から「どうすればそれを習熟できるか？」という段階へと進化させ、ビジネス価値と ROI という根強い問いに対して具体的な答えを提供し続けることである。フェアの評判は今や強固なものとなったが、その地位を維持するためには、テクノロジーと共に進化し続けなければならない。

引用文献

1. 過去最大の 152 社出展「第 34 回 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス」9 月 10 日、東京ビッグサイトで開幕 - PR TIMES, 9月 14, 2025 にアクセス、 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001963.000022608.html
2. 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス参加 | 知的財産と調査, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://ameblo.jp/123search/entry -12929414717.html
3. 知財・情報フェア 2025 でのセミナー開催レポート｜川上 成年 ...- note, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://note.com/ip_design/n/n62c1b7f2f43c
4. イーパテントおよびイーパテント・アクティスが知財情報フェアに ..., 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://note.com/anozaki/n/n1a98ea0edacb
5. 2 年ぶりの特許フェアの哀愁 - IPFbiz, 9月 14, 2025 にアクセス、 https://ipfbiz.com/archives/post -3170.html
6. イベント：日立知財ソリューション, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://www.hitachi.co.jp/Prod/comp/app/tokkyo/event.html
7. 知財実務における生成ＡＩ利活用に関する特許４件を新たに取得(合計９件)、2025 知財情報フェア＆コンファレンス出展のお知らせ | パテント・インテグレーション株式会社のプレスリリース - PR TIMES, 9月 14, 2025 にアクセス、 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000013.000086119.html
8. #NotebookLM の #特許分析 への活用ー #イーパテントアクティス ..., 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://www.youtube.com/watch?v=0XzwtV8nPd4
9. 第 34 回 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス - NTT Data, 9月 14, 2025 にアクセス、 https://www.nttdata.com/jp/ja/trends/event/2025/091001/
10. 来場のご案内 | 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://pifc.jp/2025/visit/
11. すごい知財 EXPO '25, 9月 14, 2025 にアクセス、 https://super -ip-expo.com/2025
12. ［INPIT］2025 知財・情報フェア＆コンファレンスへの出展について, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://www.inpit.go.jp/about/topic/info_20250821.html
13. 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス | イベント情報 | 東芝デジタルソリューションズ, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://www.global.toshiba/jp/company/digitalsolution/event/2025/0910 -0912.html
14. 「2025 知財・情報フェア＆コンファレンス」に出展します（開催期間：9/10～9/12） - ジー・サーチ, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://www.g -search.jp/newsrelease/2025/2025-08-22-01.html
15. 「知的財産推進計画 2025」の策定に向けた意見募集 【法人・団体からの意見】 1 意見提出法人 1- 首相官邸ホームページ, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/chitekizaisan2025/pdf/siryou2025_2.pdf
16. 2025 知財・情報フェア＆コンファレンス |, 9 月 14, 2025 にアクセス、 https://pifc.jp/2025/